目白大学　文学・言語学研究
第2号　2006年1月　49－64

『癖者ぞろい』研究(2)—演出家ブレインワーム—

久保寺昌宏

はじめに

前稿[1]に引き続き、ブレインワームの演出家的役割について考察してみたい。前稿においてはブレインワームの活躍が大団円においてクレメント判事の絶賛をあびていることに注目し、その変装と演技力について考察した。本稿においてこのテーマをさらに「言葉を紡ぐ者」つまり「詩人」をキーワードにして再考察してみたい。

まず『癖者ぞろい』の登場人物の人間関係について筋書きに沿ってみていく。

エドワード・ノーウェル父子（本稿では父をノーウェル、息子をエドワードと称す）の世代のギャップとその行き違い、についてはすでに触れた。そこでブレインワームの他の登場人物とのかかわりについて見ることになるが、エドワードの親友ウェルブレッドについてここで少々見ておかなければならない。ウェルブレッド、その名の通り、「育ちのいい者」の姉は、旧ユダヤ人町の大金持ちの商人カイトリーの奥方であり、そのほかに郷士のダウンライトという腹違いの兄、カイトリーの妹ブリジット（エドワードと結婚することになる）と一緒に住んでいる。

ところが、カイトリー家の一員になりたてのころは非常に模範的青年であったウェルブレッドは、いまやカイトリーとダウンライトとの悩みの種になっている。カイトリーは以下のように自宅がウェルブレッドのせいで「どんちゃん騒ぎの場」と化したと嘆く。

He makes my house here common, as a *Mart*,
A *Theater*, a publike receptacle
For giddie humour, and diseased riot;
And here (as in a tauerne, or a stewes)
He, and his wild associates, spend their houres,
In repetition of lasciuious iests,
Sweare, leape, drinke, dance, and reuell night by night,
Controll my seruants : and indeed what not ?
(II.i.61-68)[2]

この私の家を、どこかの市場(いちば)か、劇場か、

くぼでらまさひろ：人文学部言語文化学科　教授

そんなだれでもが勝手に出入りできる、頭のおかしな連中の
不健全などんちゃん騒ぎの場に変えてしまった。
ここを、まるで酒場か売春宿みたいにして、
あれと乱暴な仲間たちがひまをつぶしている。
下品な冗談を何べんもくり返したり、悪口を言ったり
飛びはねたり、飲んだり、踊ったり、毎夜毎夜騒ぎまくり、
召使には勝手に命令したり、まあ、したいほうだいさ。(3)

カイトリーの悩みは、最近いっしょになったばかりの美貌の妻と、生娘で妹のブリジットがこの「劇場」において彼に寝取られ亭主の役を割り振ってくるのではないかという心配であり、これは高じてすべて見聞するものがその証拠となっていく。このカイトリーもこの喜劇の終わりではiealous mans part (V.v.82)「やきもち焼きの亭主」を演じてきたことを告白する。一方ウェルブレッドの兄ダウンライト（文字通り直言居士という意）はといえば、この弟にまったく無視されていると感じ、それも姉が注意しない所為だと思っている。

さて、この「不健全などんちゃん騒ぎの場」に招待されたエドワードはスティーヴンを、ウェルブレッドの友人マシューとボバディルに紹介することになるが、先ず順序どおりに筋書きを追ってみよう。前後するが、第一幕第四場でマシューが水運びのコブの家にボバディル隊長を早朝訪れ、二人はダウンライトを誹謗中傷しscauenger（II.ii.12,13)「人間のくず」呼ばわりするが、このいわば祭派と反祭派の対立関係がこれから変装したブレインワームの活躍する舞台となっていく。

ここで劇全体のなかでブレインワームが他の登場人物達とのかかわりの中でどのような動きを示しているのか少し整理しながら見てみよう。

一幕一場、ノーウェルのところに甥のスティーヴンが鷹狩の本を借りに訪れ、道楽を諌められる。

二場、スティーヴンが紳士の身分を笠に着て手紙を届けた召使相手に威張って見せる。ノーウェルは息子宛の手紙の封を切り中身を読み、ブレインワームにこのことを黙っているように命じる。

三場、エドワード、ウェルブレッドからの手紙の内容を明らかにする。場面変わって四場は、似而非詩人のマシューがボバディル隊長を水運びのコブの家に訪ねる。五場において、この二人が、ウェルブレッドの腹違いの兄ダウンライトと喧嘩していることが明らかにされる。

第二幕一場、すでに冒頭で引用したが、カイトリーがダウンライトにウェルブレッドの乱暴狼藉について苦言を呈している。

二場、ボバディルとマシュー、カイトリー家にウェルブレッドをたずねるが、不在。代わりにダウンライトが応対するが、二人に無視され怒りを新たにする。

三場、カイトリーが自ら嫉妬に苛まされている。

四場、場所はムアフィールズ、ブレインワームが登場し、ここで初めてto insinuate with my

yong master (11)「若主人にとりいるため」こうやって軍人に変装して、主人の前進を阻むために待ち伏せしているのだということを明らかにする。そこへやってきたのは、若主人とその従兄弟のスティーヴンで、ブレインワームは言葉巧みに安物の剣をa most/pure Toledo (80-81)「正真正銘のトレドの剣」と偽り、スティーヴンに買わせることに成功する。

五場、ノーウェルが息子を追って登場、長々と最近の世の中の害悪について独白。そこへブレインワームが変装して、自分の主人を相手に、演技の限りを尽くし、雇ってもらうことに成功する。S'lid, was/there euer seene a foxe in yeeres to betray himselfe thus? (135-36) は「年を経た古狐のくせにこんなにころっとだまされてしまうものかなあ？」ブレインワームは主人がこのようにあっさりとだまされてしまったことに呆れかえる。

第三幕一場、マシューとボバディル、ウェルブレッドに会う。ウェルブレッドがあのようなおいてブレインワームはエドワードに手紙が父親に読まれたことを知らせる。また、ここで、スティーヴンが似非詩人のマシューと空威張りする軍人ボバディルに紹介される。ボバディルの武勲の話から剣の話になり、さっき買った剣を見せると安物とわかる。

二場、そこへブレインワーム登場、スティーヴンにその剣が贋物である事をあっさり認める。この場面でブレインワームはエドワードに自分の正体を次のように明かす。

> Faith, sir, I am but seruant to the drum extra-
> ordinarie, and indeed (this smokie varnish being washt off,
> and three or four patches remou'd) I appeare your worships
> in reuersion, after the decease of your good father,
> BRAYNE-WORME.
> (Ⅲ. ii. 35-39)

> 実は私、軍人とはいっても臨時で、いまだけのことでして、この顔の汚れをこうしてふき取って、貼りつけた小切れを三枚ばかりこうはがすと、下から現われますのは、やがてあなたの父上がお亡くなりになったあと、あなたが召使として引きつぐことになる――ブレインワームです。

そして今朝届けられた手紙が変装のきっかけであること、父親がこの近くのコールマン通りのクレメント判事の邸でブレインワーム＝フィッツソードの帰りを待っていることを教える。そうやってエドワードに打ち明けているブレインワームを見てウェルブレッドはそれが変装したブレインワームだと見破る。ウェルブレッドは、ノーウェルのほうに少し長く待ってもらうことにしてブレインワーム＝フィッツソードに一働きしてもらう。

三場、場面変わって、カイトリーの店、カイトリーは番頭のキャッシュ相手に、嫉妬のはけ口を

求め、本当のことを告白しようとするが、できず悶々としている。キャッシュの台詞「Whence should this floud of passion (trow) take head? ha? (140)「いったいどこから、あんなに激しい嫉妬の気持ちがほとばしり出るんだろうね、まったく」がすべてを語っている。

四場、コブとキャッシュのhumour 談義。

五場、この場面はエドワードとウェルブレッドがブレインワームの変装演技を賞賛し、その具体的な特徴をかなり詳しく述べている重要な箇所であるので少々長くなるが引用してみたい。

WEL. Beshrew me, but it was an absolute good iest, and exceedingly well carried!

E. KNO. I, and our ignorance maintain'd it as well, did it not?

WEL. Yes faith, but was't possible thou should'st not know him? I forgiue Mr. STEPHEN, for he is stupiditie it selfe!

E. KN. 'Fore God, not I, and I might have been ioyn'd patten with one of the seuen wise masters for knowing him. He had so writhen himselfe, into the habit of one of your poore *Infanterie*, your decay'd ruinous, worme-eaten gentlemen of the round: such as haue vowed to sit on the skirts of the citie, let your Prouost and his halfe-dozen of halberdeirs doe what they can; and haue translated begging out of the old hackney pace, to a fine easie amble, and made it runne as smooth, of the tongue as a shoue-groat shilling. Into the likenesse of one of these *Reformado's* had he moulded himselfe so perfectly, obseruing euery tricke of their action, as varying the accent, swearing with an *emphasis*, indeed all, with so speciall, and exquisite a grace, that (hadst thou seene him) thou would'st haue sworne, he might haue beene Serieant-*Maior*, if not Lieutenant-*Coronell* to the regiment.

WEL. Why, BRAYNE-WORME, who would haue thought thou hadst beene such an artificer?

E. KN. An artificer! An architect! except a man had studied begging all his life-time, and beene a weauer of language from his infancie, for the clothing of it! I neuer

saw his riuall.

WEL. Where got'st thou this coat, I mar'le?

BRAY. Of a *Hounds-ditch* man, sir. One of the deuil's neere kinsmen, a broker.

WEL. That cannot be, if the prouerbe hold; for, a craftie knaue needs no broker.

BRAY. True, sir; but I did need a broker, *Ergo*.

WEL. (Well put off) no craftie knaue, you'll say.

E. KN. Tut, he ha's more of these shifts.

BRAY. And yet. where I haue one, the broker ha's ten, sir.

(Ⅲ.v.1-39)(アンダーライン筆者)

ウェルブレッド　ほんとにまあ、なんてみごとにかつがれたんだろう!そんなにうまくいくことってあるのかなあ。

エドワード　そうだ、おまけにこっちが何も知らなかったんで、よけいにうまくいったってことだ。

ウェルブレッド　その通りだね。でもきみがブレインワームに気づかないなんて考えられないがなあ。スティーヴン君はまあいいよ。馬鹿そのものみたいな人だから。

エドワード　神に誓って、気づかなかった。このぼくがギリシャの七賢人の一人だったとしても見抜けはしなかったよ。なにしろくたびれた歩兵の軍服をぴったり着こんで、無残にもおちぶれてくたくたになった警邏兵そっくりだった。町中(なか)でみんなをいやがらせてやるぞ、槍を持った憲兵どもが何と言おうと知ったことか、と心を決めたみたいな連中だ。物乞いするにも老いぼれ馬みたいにとぼとぼと近づくんじゃなくて、きびきびと軽快な歩調で迫って来る。口を開けばコインはじき用のコインみたいにみがきこんでつるつるした口調でしゃべりまくる。こういう元軍人どもの一人に、こいつは完璧に化けたんだ。身のこなしのくせ、言葉のなまり、おおげさな誓いの立て方、その他なんでも実にみごとに似せてしまった。その様子を見たらきみだって、これはまちがいない、当地の連隊付きの、中佐殿とまではいかなくても、特務曹長にきまっていると誓ったことだろうよ。

ウェルブレッド　いやブレインワーム、きみがこんなすごい特技を持っていたとはね。

エドワード　特技だって?・芸術と言いたまえ、一生かけて物を乞う術(すべ)を究め尽くし、そのために使う言葉をどう練りあげればいいかを幼い時から考え抜いた人、そういう人だけだよ、ブレインワームと肩を並べられるのは。

ウェルブレッド　このコートはいったいどこで手に入れたのかね?・

ブレインワーム　古着屋ですよ。悪魔の親類だとけなされる、あの仲買人ですよ。

ウェルブレッド　それは変だな。だって「頭のいい悪党は仲買人なんか必要ない」ってことわざもあるだろう。

ブレインワーム　その通り。ところが私には仲買人が必要だった。したがって——

ウェルブレッド　うまいこと逃げたな——悪党なんかじゃない、ってことになるんだな。

エドワード　このくらいの「うまいこと」なら、この男はいくらでも言えるよ。

ブレインワーム　それでも、私に一言えるとすると、売り込み屋なら十は言いますよ。

（傍線筆者）

ブレインワームの変装は言うまでもなく、上記の引用にも述べられているように、外見だけではなく、そのしゃべり方およびその話の内容にすべてがかかっている。ブレインワームの主人老ノーウェルにもor that thou should'st disguise thy/language so, as I should not know thee? (V.iii.81-82)「言葉づかいまで、私におまえだとわからせないほど変えてしまえるなんて！」と言わせるほどその技は完璧である。

さらにこの場において、クレメント判事についてウェルブレッドがエドワードにこう紹介している。 a citie-/magistrate, a Iustice here, an excellent good Lawyer, and/a great scholler: but the onely mad, merrie, old fellow in/*Europe*! (52-55)「この地区の治安判事で、優秀な法律家で、大変な学者」で「だけどまた、こんな頭のおかしい陽気なおじさんはヨーロッパ中探してもいないだろう」。

召使の名を呼びながら出たり入ったりしているキャッシュに、ボバディルはマッチでタバコに火をつけてもらうとするが、キャッシュはマッチを受け取り退場してしまう。キャッシュがコブを連れて戻ってくる間、ボバディルは a *tabacco*-/traders mouth (96-97)「タバコ業者の宣伝」まがいにタバコを礼賛する。キャッシュはマッチのことなどはすっかり忘れている。コブはボバディルにタバコの害を説き、棒で殴られる。そばでこの騒ぎを見ていたスティーヴン、ボバディルの誓い方を、柱相手に練習している。

六場、クレメント判事の家に来たカイトリーがコブに家の様子を聞く。カイトリーは初めからよくコブのいうことなど聞かずに「大勢」の連中が押しかけてきていると思い込んでおり、嫉妬の権化になっている。

七場、ボバディルに殴られたコブ、クレメント判事にボバディルの逮捕令状を請求するが、理由がタバコのことを悪く言ったということだけで、逆に監獄送りの判決を申し渡されるが、ノーウェルのとりなして命令が撤回される。判事はノーウェルに対して次のように諭す。your sonne is/ old inough, to gouerne himselfe : let him runne his course, /it's the onely way to make him a stay'd man (III.vii.86-88)「息子さんはもう自分で自分の面倒が見られる年でしょう。自分のやりたいようにやらせておけばよろしい。」

第四幕一場、ダウンライト、カイトリーの妻にBut, by gods will, /'tis no bodies fault, but yours (Ⅳ. i . 13-14)「みんな姉さんがいけないんですよ。」とウェルブレッドの騒ぎを姉が弟に意見しないせいだと決めつける。姉も弟をwhat a strange man is this ! (19)「なんて妙なことを言う人だろう！」といって驚きを隠さない。

二場、マシュー、ブリジットを相手に詩を献呈している。ウェルブレッドとエドワードはこの場面を見て楽しんでいるところへダウンライトが戻ってきてウェルブレッドと喧嘩になり、両方剣を抜き、家中大騒ぎになる。*They all/draw, and/they of the/house/make/out to part/them* (Ⅳ. ii . SD. 127)「みな剣を抜く。この家の人々は双方を引き分けようとする。」

三場、カイトリーが戻ってくる、妻とブリジットがこの騒ぎの原因であり、またウェルブレッドはダウンライトが昔からこうだったと、this is one of my brothers/ancient humours, this. (Ⅳ. iii . 8-9)「これは兄貴の昔からの気まぐれの発作さ。」と釈明する。一方この騒ぎの中で礼儀をわきまえた紳士が一人だけとっても立派に振舞っていたエドワードがブリジットの目を引く。

四場、コブ、下宿人のボバディルに殴られたといって妻のティブに誰も家のなかに入れないように申し渡して出かける。

五場、ウェルブレッドがブレインワームにダウンライトを駆り出すように次のように依頼する。

E. KN. Well, BRAYNE-WORME, performe this businesse,
happily, and thou makest a purchase of my loue,
for-euer.

WEL. Ifaith, now let thy spirits vse their best faculties.
But, at any hand, remember the message, to my brother:
for, there's no other meanes, to start him.

BRAY. I warrant you, sir, feare nothing: I haue a
nimble soule ha's wakt all forces of my phant'sie by this
time, and put 'hem in true motion. What you haue possest
mee withall, Ile discharge it amply, sir. Make it no question.

Wel. Forth, and prosper, BRAYNE-WORME.
(Ⅳ. v . 1-11)

エドワード　では、ブレインワーム、この仕事をうまくやってくれよ。そうすれば一生恩に着るからな。

ウエルブレッド　ほんとにこんどはがんばれるだけがんばっておくれ。けど、何にしても兄貴への伝言を忘れるんじゃないよ。そのほかに兄貴をかり出す方法はないんだから。

ブレインワーム　大丈夫です、こ心配いりません。気転のきくこの私が、頭をもういっぱいはたらかせて、すつかり考えてありますから。お言いつけのことは十分にはたしま

す。ご安心ください。

ウェルブレッド　うまくやって来ておくれ。

ウェルブレッドはIn faith, shee is a maid of/good ornament, and much modestie (19-20)「妹はほんとに見たところもきれいだし、心もしとやかな娘だ。」といってエドワードと一緒にさせようとする。

六場、ノーウェルはクレメント判事の書記のフォーマルとブレインワーム（＝フィッツソード）の話をしているところにフィッツソード＝ブレインワームノーウェルのところに戻ってくる.。何もかもが息子に筒抜けであり、きっとブレインワームが手紙のことをばらしてしまったに違いない。ノーウェルはしかし、この新しく雇った軍人フィッツソードがノーウェルの召使であることをどうして知ったのか腑に落ちないが、ブレインワームは息子は学問を積んだ人として魔法を使ったんだろうと言いぬける。さらになぜこんなにも遅れたのか説明するために次のような作り話をする。

BRAY. You should rather aske, where they found me, sir, for, Ile be sworne I was going along in the street, thinking nothing, when (of a suddain) a voice calls, Mr. KNO-WEL's man ; another cries, souldier: and thus, halfe a dosen of 'hem, till they had cal'd me within a house, where I no sooner came, but they seem'd men, and out flue al their rapiers at my bosome, with some three or foure score oathes to accompanie 'hem, & al to tel me, I was but a dead man, if I did not confesse where you were, and how I was imployed, and about what; which, when they could not get out of me, (as, I protest, they must ha' dissected, and made an *Anatomie* o' me, first, and so I told 'hem,) they lockt mee vp into a roome i' the top of a high house, whence, by great miracle (hauing a light heart) I slid downe, by a bottom of pack-thred, into the street, and so scapt.
(IV. vi. 26-40)

ブレインワーム　あちらが私をどうやって見つけたのかとおたずねになった方がいいですよ。それというのも、ほんとの話、私がただぼんやりと通りを歩いていると、出しぬけにだれかが「ノーウェルさんとこの人」と呼ぶんです。「軍人さん」という声もします。そんなぐあいに五、六人から声がかかって、一軒の家の中に呼びこまれました。そこに入るとたちまち連中は本性をあらわし、剣を抜いて私の胸に突きつけ、口汚ない

ののしり言葉をたっぷり吐きちらし、ご主人はどこだ、おまえはどうして雇われることになったのだ、白状しないと命はないものと思えと、よってたかってせまるのです。で、私からは何も聞き出せないとわかると――だって私は言ってやりましたからね、聞きたけりゃまず私を八つ裂きにでも何でもするがいいって――連中は私をどこか高い建物のてっぺんの部屋に閉じこめたのです。そこから、まるで奇蹟みたいに、なにしろ私は身も心も軽いもので、細引の束を頼りにすべり下りてうまく逃げおおせたというわけです。

さらに、続けて、ノーウェルに息子に会うためにはどこに行けばいいのかこのとき耳にしたとするつくり話を付け加える。

...But,
sir, thus much I can assure you, for I heard it, while I was lockt vp, there were a great many rich merchants, and braue citizens wiues with 'hem at a feast, and your sonne, Mr. EDWARD, with-drew with one of 'hem, and has pointed to meet her anon, at one COBs house a water-bearer, that dwells by the wall. Now, there, your worship shall be sure to take him, for there he preyes, and faile he will not.
(Ⅳ. vi. 40-48)

そこでご主人、たしかなことがひとつ、それは閉じこめられていたときに聞いたのですが、連中の所では金持ちの商人やら着飾ったご婦人やらが大勢で宴会をしていて、その席から、お宅のエドワード様が、その中のひとりの女の人といっしょに抜け出して、コブという男の家で間もなくおちあう約束をなさったというのです。コブというのは城壁の近くに住んで水運びを仕事にしている男です。そこにいらっしゃればきっとつかまえられますよ。そこで獲物をものにしようとなさっているのですからね。まちがいなく現われますよ。

ブレインワームはここでフィッツソードの変装の役目を終える。But, now, I meane to appeare no more afore him in/this shape. (57-58)「この姿ではご主人の前に出るつもりはない。」次に、目の前にいる a nupson, now, of this Iustices/nouice. (59-60)「この判事さんとこの新米」を the wind-mill (78)「風車亭」に誘い酔い潰し、その書記の服をいただく計画である。

七場、ボバディルの法螺話にエドワードとウェルブレッド興じている。そうしていると、ダウンライトがおびき出されて登場し、ボバディルを殴り、剣を奪う。マシューは逃げ出す。スティーヴ

ンはダウンライトが置き忘れたマントを拾い自分の物にする。

八場、クレメント判事がカイトリーに至急来るようにという伝言するブレインワームは今度は書記の服を着て変装している。*He comes/disguis'd/like/Justice/Clements/man.* (Ⅳ.ⅷ. SD. 43)「クレメント判事の書記に変装している。」

WELL. This is perfectly rare, BRAYNE-WORME!
but how got'st thou this apparell, of the Iustices man?
BRAY. Mary sir, my proper fine pen-man would needs
bestow the grist o'me, at the wind-mill, to hear some martial
discourse; where I so marshal'd him, that I made him
drunke, with admiration! &, because, too much heat was
the cause of his distemper, I stript him starke naked as he
lay along asleepe, and borrowed his sute, to deliuer this
counterfeit message in, leauing a rustie armor, and an
old browne bill to watch him, till my returne: which shall
be, when I ha' pawn'd his apparell, and spent the better
part o' the money, perhaps.
WELL.Well, thou art a successfull merry knaue,
BRAYNE-WORME, his absence will be a good subiect for
more mirth.
(Ⅳ.ⅷ. 49-63)

ウェルブレッド　〔ブレインワームに〕これはまたうまくやったな、ブレインワーム！でもどうやって判事の書記のこの服を手に入れたんだ？

ブレインワーム　それはですね、あのすてきな書記さんが、私にどうしても風車亭で一杯ごちそうして戦争の話を聞きたいというものだから、私も話をいっぱいサーヴィスして、で向こうは感心して聞いているうちに酔いつぶれてしまったのです。で、こんなに熱くなっていては気分も悪いはずだと思って、伸びてしまったところをすっかり裸にして、服も借りて、それからいまのにせの伝言を言いに来たというわけです。かわりにさびた鎧と古い槍を一本置いてきました。私が戻るまで、それがあの男を見張っていてくれるでしょう。戻るといったって、この服を質に入れて、その金をあらかた使ってしまってからのことになるでしょうけどね。

ウェルブレッド　いや、ブレインワーム、きみはなかなかおもしろいことをうまくやるなあ。書記さんがいなくなったというのは、またいい冗談の種になるだろうよ。

九場

ブレインワーム、フォーマルに変装したまま登場。

マシューとボバディル、フォーマルに変装したブレインワームにダウンライトをクレメント判事のところに連行するために a warrant (Ⅳ.ix.30)「令状」を手に入れて欲しいと依頼するが、ブレインワームは礼金を要求する。二人とも持ち合わせがなく、その代わりに This iewell in my eare (48) your silke stockings (49) 宝石とストッキングを担保にする。ブレインワームはマシューにそのダウンライトの目印を聞く。A tall bigge man, sir; he goes in a cloke, most/commonly, of silke russet, laid about with russet lace. (61-62) 背が高くて、大柄で、いつもマントを着ていて、マントの生地はアズキ色の絹、アズキ色のレースのへり飾りがついたやつ。」そこで、ブレインワームはこの危険を伴う令状執行をだれにさせるか、Why, you were best get one o' the varlets o'/the citie, a serieant. Ile appoint you one, if you please. (Ⅳ.ix.70-71)「町の執行吏を一人雇うのがいちばんいい。もしよかったら、私がだれか頼んであげましょう。」と言って、次にダウンライトからも金品を手に入れようとする抜け目のなさを示す。

> BRAY. This is rare! now, will I goe and pawne this cloke
> of the Iustice's mans at the brokers, for a varlets sute, and
> be the varlet my selfe; and get either more pawnes, or
> more monie of DOWNE-RIGHT, for the arrest.
> (Ⅳ.ix.74-77)

> ブレインワーム　こんなうまいことがあるか!これからおれはこの、判事の書記のマントを質屋に持っていって、執行吏の制服ととりかえる。そうやって自分で執行吏になりすますのだ。そうすればこの逮捕の件でダウンライトからも、担保だか金だかがもっとまきあげられるぞ。〔退場〕

十場　ノーウェルが息子エドワードを探しにコブの家に来るがそこで会うカイトリーの妻と嫉妬に狂ったカイトリが変装した息子ではないかと錯覚するほどの異常な反応を示す。

十一場

通り。ブレインワーム、執行吏に変装して登場。ブレインワーム次のようにこの執行吏の役がこれまでの変装のなかで一番ぴったりした感じであると言う。

> Well, of all my disguises, yet, now am I most like my
> selfe: being in this Serjeants gowne. A man of my
> present profession, neuer counterfeits, till hee layes hold
> vpon a debter, and sayes, he rests him, for then hee brings

him to all manner of vnrest. A kinde of little kings wee are,
bearing the diminutiue of a mace, made like a yong arti-
chocke, that alwayes carries pepper and salt, in it selfe.
Well, I know not what danger I vnder-goe, by this exploit,
pray heauen, I come well of.
(Ⅳ.xi.1-9)

ブレインワーム　これまでいろいろ変装もしてきたが、この執行吏のガウンを着ているといちばん自分らしい気になるな。この執行吏という役目の人間はいつもは嘘はつかないものだが、人を逮捕するとなるとそうもいかないぞ。動くな、と言いながら相手をすっかり動揺させるんだから。それに執行吏は小型の王様みたいなものだ。王様の杖の小さいようなやつを持ち歩くんだから。杖の頭にはアーティチョークの花の模様がある。なめればピリッと辛いというわけだ。さて、こういう姿で活動するとどんな危険な目に会うか、よくはわからないが、できるなら会わずにすませたいものだ。

第五幕一場

クレメント判事の屋敷の一室。ノーウェル、フィツソード（＝ブレインワーム）に言われてコブの家に息子を探しに行ったが居なかった。フィツソード（＝ブレインワーム）は大分前に書記のフォーマルと出かけた、カイトリーの妻は、弟のウェルブレッドから聞いてコブの家に出かけた。とクレメント判事の質問に答える。そこに、ボバディルが判事に面会しに来る。

二場

兵士ボバディルに会うために鎧兜に身を固めたクレメント判事は、その訴えを聞いてボバディルを無視する。

三場

スティーヴン、伯父の老ノーウェルに会う。ここでブレインワームは厳しいクレメント判事の仮借ない脅しと追及に会い、正体を現す。

四場

書記のフォーマルが鎧を着て登場、例の軍人（ブレインワーム）に酒場で飲まされ身包みはがれた一部始終を語る。エドワードと結婚式を挙げたブリジット登場。

五場

クレモント判事は軍人の恰好をしたボバディルと似非詩人のマシューを You signe o'the Souldier, and picture o'the/*Poet* (49-50)「あんた、看板の絵に描いたみたいな軍人さん、それからやっぱりかっこうだけの詩人さん」を「にせもの」false (50) として見限る。が、ブレインワームを晩餐の主賓として招待する。

以上見てきたように、ブレインワームの冒険は変装の連続であり、それは前述したように他の登場人物達の関連発展において軍人、書記、執行吏と変化する。その変装のするための材料は、古着屋 *a Hounds-ditch* man（Ⅲ.v.31）から買うのである。

先ず老ノーウェルの面前に軍人フィッツソードとして、将来の主人となるエドワードには変装したブレインワームとして取り入るのである。エドワードの親友ウェルブレッドの兄ダウンライトとマシューとボバディルの喧嘩をクレメント判事に裁いてもらうために、ブレインワームは判事の書記に変装する。またダウンライトを逮捕する執行吏を演じるが、しかし、クレメント判事の厳しい追及と脅しの前に、進退窮まって元のブレインワームに戻る。

ブレインワームはこの喜劇を動かす軸のような役割を演じているという。別の言い方をすれば、ブレインワームこそが、この劇の中心で磁石のような働きを果たしているともいえる（centre attractive）[4]。しかしブレインワームの動きを詳細に追っていってみると、ウェルブレッドの役割もブレインワームを補佐するようなかたちで組み込まれていることが見えてくる。ウェルブレッドの友人関係と彼の家族関係の軋轢である。ウェルブレッドの美人の姉の家に居候する、その夫というのがこの喜劇の仲で嫉妬を演じるが、その嫉妬に火をつけるのがウェルブレッドの友人たち、マシュー、ボバディルの二人であり、特に似非詩人のマシューのブリジットへ捧げる詩は一同に面白いこと、余興を提供している。この浮ついたわ騒ぎを苦々しく思っているウェルブレッドの腹違いの兄ダウンライトは堪忍袋の尾を切らし、剣を抜き人騒動起こす。この騒動にあわせてウェルブレッドの変装はクレメント判事の書記を居酒屋でよいつぶし、その服を身ぐるみ剥いで、書記になりすまし新しい場面に対応していく。また、ブレインワームの言葉を紡ぎ、操り、聞き手を引き込む力は、これまで見てきたように、相手の同情心を買うために空涙を流して見せたり、話の内容、主にいかに勇敢に戦ったか武勇伝を語ったりすることで発揮している。一方、すでに指摘したところであるが、ノーウェルはじめ、その息子エドワードも、ブリジットに借り物の詩を捧げる詩人を演じるマシューも、また誓言と見栄ばかりを切る恰好だけの軍人ボバディルもそれぞれ言葉を使い、それぞれの愚かしさを言語化している、と見たとき、恐らく、この喜劇の本当の面白さが見えてくる。

最後に、この喜劇はブレインワームの巧みな変装、服をただ変えて外見上別人を演じるためにはしゃべり方動作まで意識的に演技することが要求されていることについては、すでに、その傍証を繰り返し引用してきたが、登場人物の多くが、詩と詩人にかかわっていると考えることができる。先ずノーウェルはかつて学生時代、この詩作に励んでいた。息子も同様に詩作をしている。ウェルブレッドは、詩人のパトロンとして、似非詩人のマシューと、誓言を必ず添えるボバディルも言葉に捕らわれている、その真似をしようとするエドワードの従兄弟スティーヴンはマシューとボバディルの写しになる。そしてこれらの愚者たちを裁くクレメント判事はといえば、彼もまたよき詩人の理解者であることが明らかになる。ウェルブレッドの台詞 Of her delight, sir, below the staires, and in/publike: her *poet*, sir.（V.v.7-8）「楽しみとかかわりがありまして。ひそかな楽しみ、人前での楽しみ―妹（ブリジット）に詩を贈る詩人」であるマシューに即興で詩作に挑戦し、その

ポケットに詰め込まれた人の詩を書き付けた紙片をたいまつの火で燃やし、それを見たノーウェルが息子に見せしめにすることを戒めるクレメント判事はNay, no speech or act of mine be drawne against/such, as professe it worthily. (V.v. 37-38)「立派な詩を書いている人たち」を非難するために使ってもらっては困る」と詩人と詩の弁護を以下のように述べる。

> ...They are not borne euerie
> yeere, as an Alderman. There goes more to the making of
> a good *Poet*, then a Sheriffe, Mr KITELY. You looke
> vpon me! though, I liue i' the citie here, amongst you, I
> will doe more reuerence, to him, when I meet him, then I
> will to the Major, out of his yeere.
> (V.v.38-43)

> そういう人は毎年生れてくるわけではないのだ、そこらの議員などとは違うのだ。役人の偉いのなどよりは立派な詩人を育てるほうがずっと大変なのですよ、カイトリーさん。いいですか、私もこうしてこの町の市民ではあるが、任期をすませた市長なんかに会うよりは、詩人に会うときのほうがずっとありがたみがあると思っていますよ。

以上のことから見えてくるのは、ブレインワームの変装を、この「言葉を紡ぐ者」という観点から捉えなおすことが許されれば、まさに言葉を自由自在に操る詩人に接近しているとも、いえなくもない。かつて、ノーウェルも詩作に手を染めた、その息子も詩人であり、この喜劇には、詩人を真似る似非詩人マシューまでも登場する。

さて、ブレインワームの変装の本質、あるいは、その面白さは外見もさることながら、その外見をもっともらしく見せる話術と臨機応変に話題を変えるにその才能にあることは想像に難くない。ブレインワームはまさに詩人として、こう言うクレメント判事の晩餐会に主賓として招かれる。彼の変装とその場その場の難局を切り抜けてきた冒険の数々は詩に値すると考えられなくもない。しかし、クレメント判事はブレインワームの行為をはっきりと詩人の行為と重ねて見ているわけではない。for the wit「おもしろいもの」として見ているのである。

> ...Thou hast done, or assisted to nothing, in my
> iudgement, but deserues to bee pardon'd for the <u>wit</u> o' the
> offence. If thy master, or anie man, here, be angrie with
> thee, I shall suspect his ingine, while I know him, for't.
> (V.iii.112-15) (アンダーライン筆者)

おまえがしたこと、手を貸したことはどれもみな、私の判断では、罪は罪でも頭のいいおもしろいものであるから、赦されるだけの値打ちがある。もしもおまえの主人であれ、その他ここにいるだれであれ、おまえに腹を立てるとすれば、それをやめない限りはその人の知性を疑わねばならん。(下線筆者)

最後に再びこの喜劇の冒頭につけられた舞台口上をみてみよう。

He rather prayes, you will be pleas'd to see
One such, to day, as other playes should be.
...
But deedes, and language, such as men doe vse:
And persons, such as *Comœdie* would chuse,
When she would shew an Image of the times,
And sport with humane follies, not with crimes.
Except, we make 'hem such by louing still
Our popular errors, when we know th'are ill.
I meane such errors, as you'll all confesse
By laughing at them, they deserue no lesse:
Which when you heartily doe, there's hope left, then,
You, that haue so grac'd monsters, may like men.
(PROLOGVE, 13-14, 21-30)

この芝居の作者の願いは、そんなことではなく、みなさまに、きょう、ここで、
他(ほか)の芝居がみなお手本にしなければならないようなものをお目にかけること。
(中略)
ただ人々の実際の振舞いやことばをそのままに、
時代の姿をあるがままに映したいがために、
人間の罪ではなく、その愚かさをこそ楽しみたいがために、
そういう喜劇にふさわしい人々を登場させてお目にかけることであります。
とはいえ私たちも自らの愚かさを罪に変えたりするかもしれません――
だれもがついやる過ちを、これはいけないと知りながら、甘やかしてしまうのです。
だれもが、笑いながら、またやってしまったと白状するような過ち、
それはたしかに笑われてしかたのないようなものではありますが、
それをみなさまが心から笑ってごらんになりますならば、まだ望みは残っております、

愚かな連中もこのように楽しめるのだから、人間にもまだ愛すべき所があるのだという望みが。

この喜劇に登場する癖者たち、(あるいは愚者たち、ノーウェル、スティーヴン、マシュー、ボバディル、カイトリー、ダウンライト) とその愚行を見て笑うエドワードとウェルブレッドたち、そしてこの喜劇に終止符を打つクレメント判事は、演出家兼演技者 (変装者、言葉を紡ぐ者) としてブレインワームの隠れた演出家的才能あるいは機転によって、本稿においてみてきたように、それぞれの役割を演じさせられている。

注

(1) 「『癖者ぞろい』研究 (1) ── 演出家ブレインワーム－」2005年7月『目白大学人文学研究』第2号、pp.113-18.

(2) 原文はすべてAnglicized Version のFolio版に従った。*Ben Jonson*, Volume III, Edited by C. H. Herford and Percy Simpson, Oxford: At the Clarendon Press, 1966 (First Edition 1927), pp. 291-403.

(3) 前稿同様、村上淑郎訳『癖者ぞろい』ベン・ジョンソン戯曲選集、Ⅰ、国書刊行会、1991を借用させていただいた。

(4) centre attractive この概念に関しては Arnold, Judd, 'The Comic Formula in *Every Man in His Humor*' in *A Grace Peculiar: Ben Jonson's Cavalier Heroes*, The Pennyslavania State Univeristy Studies, No. 35, pp.8-18において以下のように説明されている。
Jonson's use of a structural device called a "Centre attractive," a kind of sufficient cause to "draw thither ...all persons of different humours to Make up his *Perimeter*." The "Perimeter" in all of Jonson's comedies accomodated a more inclusive range of mannered types than he found in his classical models, and produced a social analysis that is alien to the Roman formulae. (中略) His major role is to bring together a variety of social types. In effect he becomes the equivalent of the "centre attractive," (p.9)
なお、本稿で見た、詩人たちノーウェル、エドワード、マシューとcentre attractive及び演出家、演技者としてのブレインワームの関連については次稿においてあらためて、再考してみたい。